

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

### 【タイトル】

転生？オレが!?リリカルな世界で!?

### 【作者名】

わかもの

### 【あらすじ】

小説やSS等でよく見る“転生”をご存知だろうか。

まず最初は不慮の事故、突然の病死、もしくは誰かをかばって事故死する。

そして神様が現れ、他の世界へ転生してくれる。

その理由は神様自身のミス、もしくはその部下or上司のミス。

そんなオレ…滝坂風人はそんな神様による転生（二次創作とSSじゃよくあるやつ）を体験することになる。

## 其の0

side 風人

「ひ…む…ここは？」

目が覚めると…・…周辺は真っ白、なんにも無い。  
オレはこんな場所は知らんぞ。

「お？起きたようだな」

男の声。オレはその声がある方へ向く。

「…あなたは？」

「私は…神様と言っておこうか」

…は？神様？ってことは…オレ…死んだの？マジで！?

ふっつーに過ごしていたのに!?

「神様だったの信じられんけど…神様ならオレの死因はわかるよな」?

「君の死因は…・…大型のトラックが君に突っ込んできた…・…所謂事故死になるな」

「待たんかい！オレは家に居たぞ！」

「えっ？・・・おっと、これは別の転生者の死因だったな」

別の転生者って…聞き捨てならんキーワードが出たんですが！  
まさかとは思つが…

「あつたあつた。君の死因は…心臓麻痺だ」

「すごい地味な死に方したのかオレ…」

・・・そうだ、死んでしまったオレはどうなるんだ？天国へ行くのか？地獄へ墮ちるのか？」

神様が少し考え、オレの質問に答える。

「そうだな。お詫びのしるしとして君は転生してもらおう」

「お詫びのしるしってどういふことなんだ？」

「実を言うと、君はまだ死ぬ日がかかなり先なんだ。私のミスでそうしてしまったからね」

「なーんかオレがよく読む小説やSSみたいな展開だな…」

「そうだな。この作品がそうだったりするしな」

「メタはやめろと」

閑話休題。

「では本題に入ろうか」

「す」

神様が真面目な顔をする。

「転生する際に何かほしいものは無いかな？」

「欲しい物……」

欲しい物、ねえ……オレが欲しい物は……

オレは深く考える。そしてオレはふと、一つの言葉を発する。

「質問なんだけどさ、施設関連とかはOKなんか？」

「施設関連でもなんでもいいぞ、君が今考えている施設だってできる」

うあ、読まれてたのか。

じゃあ、まずは……

「まずはサガフロの各術がほしい。次に気を扱えるようにしてほしいんだ」

神様は頷く。

「ふむ。次はないかな？」

「次は……地下施設がほしい。ドラゴンボールのトレーニングの施設と医療施設の2つだ」

「わかった。これでいいのかな？」

「ああ。あと、容姿はこのままにして欲しいんだ」

「わかった。君の欲しい物は全部かな？」

オレは頷く。前々から欲しかったんだよねそうというのが。

「これから君が転生する世界は、私が決めさせてもらう方がいいかな？」

「たのんます。」

「よし、少し待ってくれ。…ああ、そうだ。これから君が転生する世界の名前は伏せさせてもらおう」

「え？なんで？」

「これには深い理由があるのだが、一部の転生者に邪な考えがあった者がいたからな。

おそらく世界が崩壊する恐れがあるんだ」

それって下手したらトンデモなことになるからか。

神様は神様で大変なんだな・・・

「…よし。準備ができたぞ。起立ッ！気をつけッ!!」

「ッ!!」

思わず立ち上がり、ビシッとしてしまった。

いやあ、学校の体育の並ぶときを思い出すねェ。

「最後に一つ、君の名前は？」

「滝坂風人」

「よし、滝坂風人。新たな人生を堪能するといいい」

神様が指を鳴らすと、オレの足元に穴が開いて…っって!?

「転生じゃよくあるやつかよおおおお!?!」

転生しても普通に生活できるかなあ・・・  
オレは落ちながらそう考えていた。

## 其の1

side 風人

「うおおお!!」

オレはガバッと起き上がる。  
そして、辺りを見回す。

「…なんだ、夢か・・・！変にリアルだったな」

そう、落ちていく夢だ。

オレが死んだとされて、“新しい人生を送るといい”といわれてオレの足元に穴が開いて・・・

…やめよう。こつこつというのは悪い夢だ。

オレは気を紛らわす為に時計を見る。

「結構早く起きちまったか」

体を伸ばし、部屋を出てリビングに行くことにする。

階段を下りてリビングに行くと、お爺さんがいた。  
その人はお爺さんと思えない程軽快で元気な人だ。

「あれ、じーちゃん起きるの早いね」

「ん？おお、風人！お前さんが早起きとは、関心関心！」

オレがじーちゃんと呼ぶのはオレ、滝坂風人（たきさかかざと）の祖父。名前は滝坂鉄斎（たきさかてっさい）。

オレの自慢のじーちゃんだ！

だけど早起きとは違うけどネ・・・

オレは指で頬をかきながら

「早く起きた・・・というより、悪い夢見ちゃってさ、なんだか変に現実的だったんだよ」

「ふうむ・・・」

じーちゃんが考え込み、俺に尋ねてきた。

「ならば風人よ。組み手をしてみんか？悪い夢のいやな気分もふつとぶぞー！」

「じーちゃんが組み手がしたいだけじゃないの？」

「ハハハ！そーいうことは無しじゃ！そういう風人こそ嫌がっておらんんじゃないかの？」

「あ、わかつちやう？」

オレとじーちゃんは笑いあった。

「では行こうか。ついて来なさい」

「うん」



オレはじーちゃんと一緒についていく。  
着いた場所はオレのじーちゃんの書斎だ。  
たまにじーちゃんの書斎にいつて本を読んでいたっけな。  
…裸の女性の本もあったけど。

「風人よ・・・これを覚えておきなさい」

じーちゃんは木彫り熊の置物を時計回りに回す。  
すると本棚が動き出したのだ。

(・・・ひ、秘密基地みたいだ・・・！！すげえ！！)

オレはこの瞬間をみてすごい興奮してる。  
ぜったい目エ輝かせて興奮してるよ、オレ。

「ほれ、風人、行くぞ？」

「あ、待ってー！」

オレはじーちゃんの後を追いかける。  
歩くこと数分・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！！！」

オレは目を疑った。いつも通りの風景が反転したかのように。  
機械的な空間だった。

「じーちゃん・・・これは一体・・・」

「お前さんのお父さんが作った地下施設じゃ。修行という名目でな」

「父さんが？」

「そうじゃ。そろそろ着くぞ？」

オレの父さんがこんなん作ってたなんて……ん？てことはあの書齋は父さんのだったのか。

父さんてばああいう趣味あつたのか……

じーちゃんが扉を開けると広い空間に出た。

「……じーちゃん。ここで組み手すんの？」

「そうじゃな。着替えはそこにあるから胴着に着替えなさい」

「はい」

オレはすぐに着替えることにした。

数分間経過……

「よし、では始めるとしようか！」

「今度こそじーちゃんに勝つよ！」

数十分間経過……

やっぱり負けました……

じーちゃんの動きには読めてたんだけど、全部ギリギリでかわされちまった……

やっぱりじーちゃんには敵わないア……

「ハア・・・ハア・・・」

「まだまだ甘い、風人よ！」

「くっそー・・・じーちゃんの使ってたヤツ、なんなのさー・・・」

「それについては後で話そうか。ほれ、そろそろ学校に行く時間じゃぞ？」

「うえ？・・・あ、ホントだ」

オレ達はリビングに戻り、オレは部屋に戻って学校に行く支度をす  
る。

じーちゃんは朝飯の準備だ。

オレが食事を済ませ、玄関から出ようとしたとき

「風人！これを持っていきなさい」

じーちゃんから呼び止められ、首飾りをもらった。

ドックタグみたいなヤツだ。真ん中の部分に青い宝石が埋め込  
である。

「これは？」

「お前さんの父さんが誕生日プレゼントのお守り・・・だそっじゃ

ちと遅れてしまったがの、と付け足すじーちゃん。

「これでも嬉しい位だよ。ありがとっじーちゃん。

「遅れてもいいよ、サンキユ。じゃ、行ってくる」

「車に気をしけるんじゃぞー」

道中、何事もなく普通に学校にたどり着いた。  
人生、何事もないほうがいいんだよね。

・・・と、思っていた時期が僕にもありました。

何でかっていうと、この教室の一人、銀髪の子がいてさ、みんなのアイドル達を口説いてんだよね。

そのうえポジティブ思考なヤツなんだよね・・・  
みんなのアイドル達は嫌がってるみたいだが・・・

他の男の子が一緒のときは「モブ」だの何だの言って脅して離れさせようとしてるし・・・

そのせいで誰もみんな銀髪に近づこうとしなくなったよね。

・・・そろそろ、止めますか。

「おーい銀髪君」

「あア？何の用だ？モブ」

うーわ、攻撃的な眼してやがる。

「そろそろ授業が始まるよー席に着こっせ銀髪君」

「・・・おめェな。俺には天龍王河っていう名前があるんだよモブが」

「オレにも滝坂風人っていう名前があるんだよね銀髪君。後・・・」

オレは周りが聞こえないくらいの声で話す。

「あんま口説き続いていると好感度だだ下がりがだよ？」

後、執拗に口説いてたら本当に見向きしなくなるよ」

「・・・!!わかったよ」

と、オレはそう言った。

王河はかなり驚いてたみたいだったが・・・

授業の休憩時間に入って・・・

「あ、あの」

「...ん？」

声かけられたのはあのアイドル達だ。

あれ？オレ何かしたっけな・・・

「あの時はありがとう。止めてくれて」

「・・・なんの話かな？」

「惚けないの。あの王河の事よ」

「・・・ああ、あの銀髪君か」

「あの時、王河君になんて話したの？」

「ん？ああ・・・なんとなく話」

「曖昧ねえ・・・」

その後、アイドル達と軽い話と自己紹介して休憩時間が終わった。・・・その所為で男子生徒たちの視線がカーナーリ集まっていた。あの銀髪君は考え込んでいたが・・・

side 王河

俺の名は天龍王河。転生者だ！

俺の目標は俺のハーレムを作ることだ！

・・・だったのだが。

あのモブ・・・いや風人だったか。俺がなのは達を口説いていると  
きに

アイツ・・・滝坂風人は現れた。

アイツを見たときはパツとしないヤツだった。

俺のハーレムの邪魔するヤツだと思った。

アイツは周りに聞こえないように俺にこう言った。

「あんま口説き続いていると好感度だだ下がりがだよ？」

後、執拗に口説いてたら本当に見向きしなくなるよ」

なんなんだ、アイツは・・・！

まるでわかってるような言い方をして・・・！

もしかしてアイツも転生者なのか・・・!?

だがそれだけで決め付けるのはまだ証拠が少ない。  
それまでは情報収集しなければ・・・

だがアイツの言ったことは本当なんだろうか・・・?  
ちょっと思い返してみるか。

思考中・・・

・・・ありまくりだったorz  
よくよく考えてみたらなのは達・・・

嫌がっ て いた じゃ ん ！ ！  
アイツの言ったことは本当だったか・・・  
やべえ。俺としたことが・・・！

どうする？謝るか？

でも今までやってたし嫌がるだろーなー・・・

この後俺はあーでもないこーでもないと唸りながら  
考え続けていた。

side 風人

昼食前にアイドル達・・・高町さん達だっけか。  
オレはその3人に昼食に誘われ、現在屋上に居ます。

「風人君のお弁当すげいいね」

「ああ、じーちゃんが作ってくれた」

「風人君のお爺ちゃん？」

「うん、両親が居ないときじーちゃん一人で頑張ってたんだ」

「すごいね、風人君のお爺ちゃんは」

「やっぱりじーちゃんの作る弁当がすごいのかな？」

「おーここに居たのか皆」

声がるほつへ向く。あの銀髪君・・・天龍王河だっけ。  
なのは達が一瞬いやな顔したぞ・・・何をしたんだ？

「やっぱりいやな顔するか・・・」

いつもの王河じゃない・・・オレの忠告が効いたのかな？

「アンタは・・・王河君だっけ？」

「お前は・・・風人だったか。なのは達に用があるがいいか？」

「ああ、いいよ」

オレは一旦席を外し、周りを眺めることにする。  
弁当はそこにおいてきた。

はつきり言っつて、あの場の空気に入れそうもない。

持って来りゃよかった・・・！（泣）



「もっさいぞ」

王河からの声。オレはなのは達の居るところへ行く。  
「この場の空気になにかしら変な感じになってるが・・・？」

「王河君はなんていったんだ？」

「えっと・・・謝りに来たんだって」

「じゃあ、なんで変な感じがするんだ・・・？」

「えーっと・・・」

「察した」

なのはがアリサの方へ見る。

土下座してる王河と腕を組んで立っているアリサの姿が。

「頼む！何でもするから！」

「・・・ん？何でもするって言ったわね？」

「はいそこまでッ！昼食に入ろっぜ？」

オレがストップをかける。何かする事がズレて明後日の方向に行ってしまうそうだったからな！

閑話休題。

オレ達5人の昼食が終わり、教室へ戻った。

王河は許してくれたそうだ。・・・そのかわり主にアリサ達のお願い

いを聞くようになったらしいが。

うん。こつこつ学校生活も悪くないね。

## 其の2

side 風人

授業が終わり、放課後になった。

オレ達5人一緒に帰っている。

オレと王河は何かしら歯車が噛み合ったかのように意気投合したのだ。

まあ、マンガとかゲームとかマンガとかゲームとか。

アリサが近道しようとして提案した。本人曰く、塾への近道らしい。

オレは断るうとしたが、アリサが覚えておいたほうがいいと言われたので、従うことにした。

…断ったらなんか怖い気がして…

アリサ達の目的地が近くなったとき、突然なのはと王河が立ち止まった。

「なのは？王河？突然どうしたんだよ？」

オレは立ち止まった2人に声をかける。

「ねえ・・・今何か聞こえなかった？」

「ああ、なんか人の声がしてさ」

なのはと王河がオレ、アリサ、すずかに対して質問をする。

「人の声？オレは聞こえなかったぞ？」

「私もよ」

「うん、私も」

顔を見合わせ、そう答えるオレ達。

なのはと王河はうーん、と首を傾げた。

気のせいじゃないのか？と言おうとした時、なのはと王河が突然走り出した。

何事!?

「お、おい!?!どこ行くんだ!?!」

「王河!?!なのは!?!」

「王河君!?!なのはちゃん!?!」

「2人を追いかけるぞ!?!」

オレ達3人は2人を追いかける。

side      なのは

放課後、アリサちゃんとすずかちゃん、王河君と風人君と一緒に帰ろうと言いました。

風人君はなんとというか、どこか不思議な雰囲気だったかな。

あの王河君を改心させるんだもん。

王河君は、当分私達の願いを聞くことになるかも。さーてどんなお願いを聞いてもらおうかな。

アリサちゃんが近道しようって提案してきたの。塾への近道だつて。

風人君は遠慮してたけど、アリサちゃんの押しが効いたのか、一緒にいくことになったの。

『助けて』

「……………!？」

私は突然立ち止まる。同じく王河君も何か感じたみたい。

風人君が私達に声をかけてきた。

私はみんなに人の声がしなかったか聞いてみる。

王河君も私と同じく人の声が聞こえていたんだね。

だけど風人君とアリサちゃんとすずかちゃんは聞こえなかったみたい…。

私達の気のせいなのかな…？

『助けて!』

また声が聞こえた! 声がする方は…あっち!

「王河君！」

「おう！」

王河君と一緒に声がするところへ走っていく。

風人君達には悪いけど…

side 風人

一体なんだってんだ…

なのはと王河が突然走り出して…まるでなにかを感じたかのように向かって行ったぞ…

「一体どうしたのかしら…2人とも」

「幽霊の声…だったりしてな」

「ちょ…ちょっとやめてよ！そういうのは！」

「ワリワリ。冗談だよ」

「でも…2人とも急にどうしたんだろうね？」

そこだよ。そこがわからない。

オレの人生の中で一番不思議な体験をしている。

オレ達はなのはと王河に追いつくと、なのはが何かを抱えている。どうやら動物のようだ。首に赤い宝石がつけている。

「なのは、それ抱えてるのは・・・イタチ・・・か？」

「イタチみたいだけど、フェレットみたいだね」

「え・・・？フェレットって普通色は白黒・・・」

「その子、怪我してるみたい！」

「どうしよう?!?とりあえず病院!?!」

「確か近くに動物病院があったはずだ、そこに行こう！」

王河が動物病院に行く事を提案した。オレ達は近くの動物病院へ向かった。

でもなんだろう、オレのツッコミスルーされてなんか目から・・・

動物病院の先生の話によると、怪我は軽いですんでいたようだ。脱走して、どうすれば良いかわからず迷っていたのかもしれない、だそうだ。

オレが違和感を感じるのは、イタチ・・・もとい、フェレットから何かを感じる物がある。

まるで、姿が変わった感じがするようじ。

アリス達は塾の時間を思い出し、動物病院を出る。

オレはじーちゃんの稽古があるからここで別れることになる。

数十分後…

「では風人よ、さっきのヤツを教えてやるわ」

地下のトレーニングルームにて、オレが気になってたじーちゃんの力。

「これで解るはずだ。」

「……むんッ!!」

「!!!!」

ドンッ!という衝撃。オレは一瞬だけが吹き飛ばされかけ、よろめいてしまった。

じーちゃんからつつすらとだが、白いオーラが出ている。

「じーちゃん……それは一体……」

「じーっは【気】というヤツじゃ」

「気?」

「気とは生物すべてに宿るエネルギー。生命力みたいなもんじゃな」

「じゃあ、全部ギリギリで避けたのは…気のおかげってこと?」

「まあ、そうなるのう。じゃが、これも実力で掴んだんじゃぞ?」

マジでかーっぱりじーちゃんはスゲーや!



「じーちゃん！オレにも気を使えるかな!？」

「今のお前なら使えるはずじゃ。では今回は気の練習と行こうか！」

「うすー！」

それから、じーちゃんと一緒に気のトレーニングを行い、

数時間かけて気のコントロール、気を使った技術を伝授した。

「わしは数十年かかって覚えたというのに、お前さんは数時間で物にするとはのう……」

「自分でも信じられないくらいだよ。まるで初めから覚えてる感じ……」

「そうじゃ、風人。お前さんにもうひとつ伝授したい術がある」

「術？」

「そう。その術の名は……【心術】」

「心術……？」

「聞いて知るより見て知ったほうがいいのう。風人、下がってなさい」

オレはじーちゃんの言うとおりに下がる。

「とくと見よ、心術の力を」

じーちゃんの眼がするどくなり、構える。

「…【生命波動】!!」

足元から陣らしきものが浮かび上がり、じーちゃんの体が光り出し、その光が鋭い槍のように変わる。

「……!!!」

オレは声が出なかった。じーちゃんの体から光が出てきて、その光が鋭い槍のようにかわったのだ。驚かないはずが無い。

「じーちゃん……そ……それが心術ってヤツ……なの？」

「如何にも。心術を極めた者は強大な力となるのじゃ」

じーちゃんは生命波動を解除し、オレに近づく。

「風人よ、どうする？決めるのはお前さん次第じゃ」

……オレは、心術を見たとき最初は恐怖を感じたよ。だけどオレはその術を使ってみたい。

「…やるよ、じーちゃん。心術、教えてください」

「うむ。お前の覚悟、聞き入れたぞ」

オレはじーちゃんからの指導の下、心術のいろは、方法、術の数、訓練<sup>。</sup>

オレは少しながらも心術の一部を会得した。

「わしからは心術の全てを話した。後は自分自身経験を積んでいけばよ」

「うす」

「じゃあ晩飯にしようか。風人よ、お前さんは風呂に入ってきてなさい」

「はい」

地下施設から出たオレはオレの部屋から着替えを取り出し、風呂場へ向かった。

早朝にて、オレとジーちゃんはニュース番組を見ているとき、道路がぼろぼろになってたり電柱が倒れてたりの惨状が映し出されている。しかも地元だ。

「物騒じゃのう」

「ほんとだね・・・」